

---

# 伝文

日本口承文芸学会 会報  
第78号 2026年2月発行

日本口承文芸学会  
〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28  
國學院大學文学部 立石展大研究室  
Tel: 03-5466-4460  
E-mail: info@ko-sho.org

---

## 邂逅

中村 とも子

昔話「松山鏡」は、「父と息子」「母と娘」の二通りの人物設定があり、母娘の話は全国でわずか8例しか伝承されていない。そこに疑問を抱いてから数年、手がかりを捜すうち、ある論文の注記から、平野幸作氏による「松山鏡考」（昭和59年自家版）が国立国会図書館に所蔵されていると知った。早速出向いて書庫から出してもらったそれは（現在はデジタルコレクションで読むことができる）クリーム色の表紙に包まれ、B4判用紙に複写した数十枚を二つ折りにしたもので、題字も本文もすべて手書きの手作りであった。平野氏は40部ほどコピー機で複写し、うちの1部を国会図書館に寄贈していた。

平野幸作氏（ひらの・こうさく 昭和6～平成24年）は新潟県中魚沼郡に生まれ、長らく小学校教員として勤務した。同郷の随筆家鈴木牧之の、謡曲「松山鏡」と鏡池にまつわる記述に違和感を覚え、研究しようと思いつく。そして職責と両立させるために、ユニークな「鉄則」を定める【終わりを定めず何年でも時間をかける・雪のない時資料を集め、冬、原稿を書く・コピー代以外に金はかけない・綿密な行動計画により、出先の図書館を最大限利用する】。「松山鏡」が題材の謡曲、落語、昔話、伝説、教科書など、足で歩いて資料や文献を集める。それらを整理して「松山鏡」という文芸の全体像を明らかにする。単身赴任中の冬、5メートルを超す雪に囲まれた宿舎の中で「自炊の食器を片付けると、来る日も来る日もペンを執った。すでに実質的に亡び去った他愛のないむかしの話について、一途に無邪気に書き続けた」。やがて現実が立ちふさがってくる。やっとみつけたと自負する論点にはすでに先学の手が届いており「自分のやるべきことはない」と失望を味わう。しかし、完璧に見える論文にほんのわずかな隙間が見つかる。そこに、自分の研究が成立する余地があると、氏は再び奮起する。「私自身には勉強になったことは多くあったが、私自身が発見したことは一つもない。他人の研究をなぞったに過ぎないが、今後、私と同じような関心を持つものがあらわれたら、少しは間違いなく役立つであろう」と結んでいる。

誰に頼まれたのでもない、達成したからといって誰もほめてくれない。それでも、今の自分の為でなく、将来の誰かの為に、時間をかけて探究を続けた。世間に名前が出ることがなくても地道な努力を続けた人たちが、平野氏のほかにたくさんいたに違いない。そのような人として、研究者としてのありようが今の口承文芸研究の下地を作ってくれたのではないか。平野氏のことは私たちの行く手に明かりを灯してくれる。志が同じならば、時代を超えて道は交差し、埋もれている成果にかならず巡り合えると教えてくれる。

（東京都）

参考：中村とも子「母娘をめぐる『松山鏡』：再話作品と昔話」『昔話伝説研究36号』2017年 昔話伝説研究会／平野幸作『つまりの里 薬師信仰』平成25年（2013年） 自家版

## 第 88 回 研究例会 報告

2025 年 10 月 11 日（土） オンライン（Zoom）にて開催

### 「句碑をめぐる伝承－俳人ネットワークと口承文芸－」 報告

高塚 さより(神奈川県)

句碑をめぐる伝承のある事象を取り上げ、俳人ネットワークと口承文芸の問題について考えた。はじめに例会委員の高塚が、2024 年 10 月、深大寺（調布市）にて行われた、鈴木しげを氏（「鶴」主宰）句碑開眼式の参列報告を踏まえ、句碑建立と俳人ネットワークの関わり、それを口承文芸研究として捉える意図を説明した。パネリストのお二人には、句碑や庵など俳諧史蹟の建立や継承、さらにはその背景に存在する、関連伝承や俳人ネットワーク、地域の問題をお話しいただいた。

小堀光夫氏は「西行伝承と鳴立庵」と題して、日本三大俳諧道場の一つ、神奈川県中郡大磯町にある鳴立庵において、西行伝承が大磯に定められ、歴代庵主と俳人ネットワークによってどのように伝えられてきたかを取り上げられた。大淀三千風以降、縁起や西行ゆかりの品々、句碑が、師系が変わっても庵の由緒や正当性を支える事物として機能し、西行伝承がそれらの拠り所となってきたことを説かれた。また、埼玉県比企郡ときがわ町の小室家、その師事していた川村碩布など、西行伝承を背景としながら、俳人ネットワークという形で鳴立庵と繋がっていたことを指摘された。そして西行伝承の浸透が、鳴立庵の成立と継承を支え、俳句実作や文化交流の場であり続けてきたことにも言及された。

玉水洋匡氏は「阿漕塚と松尾芭蕉」と題して、謡曲「阿漕」などで知られる阿漕浦（三重県津市）近くに建つ、平治を供養する阿漕塚と、隣接する松尾芭蕉句碑を取り上げられた。まず、句碑に刻まれた句は、本碑と地域の一部の人々のみで芭蕉句として伝承されてきた「不明句」であることを明示。句碑成立の経緯について、地元俳人と後ろ盾となった宗匠の俳人ネットワーク、建立時には境内であった上宮寺の観点から検証された。また、句碑と句が地域のなかでどのように享受されて



鳴立庵（小堀光夫氏撮影）



阿漕塚（右手）と松尾芭蕉句碑（左手）  
（玉水洋匡氏撮影）

きたのか、上宮寺や文化観光の関与を含め考察された。そして、句碑の現状を、俳人、寺院、地域の変化に加え、研究者の介入などの影響により、「不明句」ゆえの不安定な状況にあることを説明し、それらを含めた上でどう向き合っていくべきかを今後の問題点として提唱された。

コメンテーターの伊藤龍平氏は、『芭蕉翁行脚怪談袋』、三囲神社（墨田区）の其角伝承などの事例を挙げて、共通する問題として、美濃派や事物の存在、さらに伝承が俳人ネットワークを超えられるのかという点を提示された上で、進行を務められた。質疑応答では、特殊な知識でつながる伝承母体とその内外における伝承、さらに俳句結社が変容しているなかでの、庵や句会のほか地域におけるコミュニティと伝承の実態について議論された。また、権威と非権威という構造から句碑や伝承を問う視点が出された。句碑や庵が本質的に権威に裏付けられる性質を持っている点や、西行や阿漕平治がそもそも権威に属さない人物の伝承であることなどを考えると、普遍的な問題を孕むテーマである可能性が示された。話題は、研究者のあり方や西行と芭蕉の認識のされ方の違いにも及んだ。

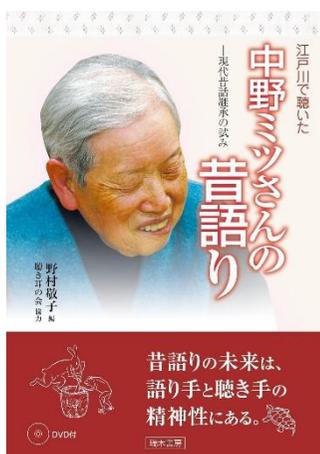
## 特集：各地の語り・語り手・語りの場の紹介

### 東京都「聴き耳の会」の活動

山田 栄克(東京都)

「聴き耳の会」は、野村敬子氏が、新潟出身の中野ミツ氏（1934年生、2023年6月逝去）の昔話を聞くことを目的に2011年1月に始めた会である。この経緯については『東京で語り継ぐ昔語りー聴き耳の会 10周年を記念してー』（石井正己・野村敬子編 東京学芸大学2021年11月）に詳しい。（この書籍はこの会に関わっている人物のそれぞれの言葉が寄せられており、大変興味深い。）

この会の発足のもととなった中野ミツ氏の語りは、『江戸川で聴いた中野ミツさんの昔語りー現代昔話継承の試みー』（野村敬子編 瑞木書房2012年6月）と『続・江戸川区で聴いた 中野ミツさんの昔語りーありがとうミツさん 最後の語りー』（野村敬子監修 聴き耳の会編 自費出版2024年6月）で確認することができる。この書籍で興味深いのは、昔話に入る前後のやり取りも収められている点である。それは野村氏が「ミツさんは彼女の昔話を聴く相手に恵まれ



『江戸川で聴いた 中野ミツさんの昔語り』及び『続・江戸川区で聴いた 中野ミツさんの昔語り』

なかったのだと理解できた。(中略) 聴き手になろう。声の復権があるかもしれない。(中略) 聴くことを主眼とした現代昔話の場を拓くことにした。」(『中野ミツさんの昔語り』)と述べているように、聴き手と語りの関係性を重視していたからであろう。

今からちょうど10年前、2016年2月発行の『伝え』第58号の特集「各地の語り・語り手・語りの場の紹介 第2回」で同会が取りあげられている。報告者で同会主催者の野村敬子氏は、「融通無碍。本会の特徴は考え方や行動が何物にも束縛されず、自由自在であることに尽きる。そして会は流動的な表情を持つ。『来るものは拒まず去る者は追わず』と会員の誰かが言う如くである。成立5年。常時月例会は30人前後の参加者があり、語りの会、イベント、講演会、ボランティアなどの情報交換。情報への反応は鋭く積極的な参加がみられる。当初、野村自宅で中野ミツさんの昔話を数人で聴いていたが、次第に聴き手が数を増して『聴き耳の会』結成に至った。」と述べている。同会は現在もこの考えに則って活動しているが、本特集では現状の活動について報告したい。

基本的には月に1度、江戸川区立下小岩会館で活動しているが、それだけではなくイベントにも多く参加したり、主催したりしている。例えば、2025年10月12日には「幼なと語る」と題して渋谷民話の会、國學院大學語りと伝承の研究会とともに埴保己一資料館で語りの会を主催し、語りを披露している。そこでは昔話のほか紙芝居「黄金バット」の実演があったりパペットを用いた語りもあったりと、この会の多様性を表していた。また、同年11月9日には「ことばの祭り」として20名あまりの語りが披露された。ここでも昔話だけではなく、戦地を体験した父の一言や『夢十夜』の朗読、「江戸しりとりのうた」や紙芝居等、この会の活動の豊かさを実感することができる会となり、参加者は50名を超えた。

同年12月の例会では平日にもかかわらず20名を超す会員が集

12:45 野村敬子先生 始まりの挨拶

1	田澤なほこ	立市買い(たちまちがい)の話
2	板鼻弘子	父の一言
3	恩田典子	のつべらぼう
4	渡部百子	ガニのふんどし
5	マイヤース景子	やまんばの産
6	間中一代	南部太郎

休憩 10分

7	中川ヤエ子	月の夜ざらし
8	津田尚子	小僧と山んば
9	兼子耐子	たまごのカラの酒つくり
10	岡田千佳子	王子さまの耳は、ろばの耳
11	平井まゆみ	たかにさらわれた子
12	清水七重	招待状
13	いわまたろう	夢十夜・第一夜

休憩 10分

14	小松千枝子	江戸しりとりのうた
15	小園まゆみ	びんぼうこびと
16	小林満智子	魚をくれた河童
17	飯泉住子	半田稲荷の鯛人坊主
18	小倉由起江	猿地蔵
19	吉田雅枝	蛇酒
20	吉野治子	金の茄子
21	住谷信夫	悪西の怪童子(紙芝居)

締め挨拶

## 「ことばの祭り」

聴き耳の会11月例会

2025年  
**11月9日(日)**

**12:30 受付開始**

**12:45 開始**

会場：  
江戸川区南小岩コミュニティ会館  
東京都江戸川区南小岩7丁目17番12号

「ことばの祭りー聴き耳の会11月例会」プログラム  
(2025年11月9日)

4

まり、車座になって各自 3 分間で全員が話をしていた。参加者は東京都江戸川区や隣接する葛飾区、さらには杉並区の語り手や栃木県の語り手など、江戸川区という地域の枠を超えた広がりを見せている。

内容としては近況から歌謡曲へ展開したり、昔の話をしたり、最近訪れたところの話をしたりと多岐にわたる。昔話もあって、語りの場で披露するために初めて語ってみ

るというものや、聞いて面白かったからここで語ってみたいというものもある。そこに野村氏が一言付け加えていく。休憩時間や例会終了後には、気になった方のもとに話しかけに行く。そしてそれが小さなグループとなり、話に花を咲かせる。この会の様子を野村氏は「観音講」と称したが、言い得て妙であろう。話は尽きない。

昔話は、語りの場がなくては成り立たない。そしてそこには「語り手」と「聴き手」がいる。聴き手の言葉は長らく切り捨てられてきたように思う。しかし、この会は語り手だけの会ではない。聴きたいという人々が集まった会である。聴きたいという気持ちから語りたい、話したいという形につながっていく。その始まりはまさしく「聴き手」である。そして「聴き手」がいるからこそ、語り手も語るのである。

初めに挙げた『中野ミツさんの昔語り』の中に「母親は本当に昔話の好きな人でした。私が東京に来てからですが、（中略）兄嫁が外から帰ってきたところ家の中から人の声がするというのです。家の戸には年取った母一人なので鍵を掛けていたそうです。兄嫁が耳を寄せると母親が誰もいない家で、昔話を語っていたのですよ。聴く人のない昔話。家には誰もいないんですよ。」という中野氏の言葉が寄せられている。この悲痛な聴き手の希求がこの会で果たされ、それを大切にしたらからこそ、語り手の一方通行に止まらない例会がある。失敗しても、言葉につまってもメモを見ても、だれもそれを気に留めない。ただ話にのめり込む。「聴き手」が主となる会だからこそ、自分の言葉で自分のことを語り、話すのである。

例会は基本的に毎月第四火曜日に、江戸川区の施設で行われる。昔話を語っているという人はもちろん、これから語りたいと思う人、昔話を聞きたい、昔の生活に興味があるという人は誰でも参加することができる。詳しくは HP (<https://kikimiminokai.wixsite.com/my-site>) があるので、そちらを参照されたい。

謝辞：

本報告を行うにあたり、野村敬子氏、本学会会員の清野知子氏、「聴き耳の会」事務局の方々、会員の皆様に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。



「一ことばの祭りー聴き耳の会 11 月例会」の様子  
(2025 年 11 月 9 日)

## 事務局便り

### ○受贈書籍

- ・山下宗久『読み書きのない世界 無文字社会の文化を知る七章』2026年1月 筑摩書房

### 日本口承文芸学会を広くご紹介ください

日本口承文芸学会への入会を希望される場合は、事務局にご連絡いただくか、学会 HP (<https://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金なし、年会費 4,000 円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用ください。